

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 原寛道

### 論文題目 散策観光のための歩行者用案内標識のあり方に関する研究

本論文は、地域観光地において様々な魅力を散策することによって得られる歩行者用案内標識の基本的なあり方を示すことを研究目的としている。

近年、人々は、ゆとりある時間の中で、複合施設や地域観光地などで、空間そのものの豊かさを享受する傾向が高まってきている。従来の案内標識は、主に目的地への効率的な誘導が重視されているが、歩いて散策する観光や、空間そのものを魅力とする施設などを利用する場面では、人々は自分の興味に応じ、その場の状況との関わりの中で行動するため、従来の誘導的な案内標識とは異なるあり方が求められることが背景となっている。

第1章、第2章では、大規模な総合公園において案内標識の有効性の検証を行った。既定目的がある場合は、経路選択の可能性は少なく、散策の範囲は面的な広がりには欠けることが明らかになった。そして、散策対象空間に対する関わりは客観的で、正確な空間把握がされやすい事が分かった。既定目的がない場合は、主体的に現場の空間情報を得ることで散策は広がるが、空間情報が得られないと狭まる。そして、空間に対する関わり方は主観的となるが、正確な空間把握はされにくい傾向がある事が明らかになった。

公園内における散策歩行は、散策的経路選択と目的経路選択の2つの経路選択によって構成され、散策歩行における案内標識の働きを整理し、誘導案内標識と周辺地図標識が散策歩行に対する働きを図式化して理解した。

これらのことから、誘導案内標識は散策歩行の中で、頻度が少ない目的経路選択に対して有効に働く機能であるため、散策歩行に対する要求を、十分に満たすことができないことが明らかになった。

第3章では、実際の観光地を対象とし、散策歩行の実態の把握を行った。観光客は、散策観光に対しての期待は高いが、イベントのように企画がされないと、主体的な散策は実行されにくいことが明らかになった。また、様々な情報媒体が統一されずに提供されることで、情報量は十分であっても、混乱して行動が促進されていないことが分かった。

第4章では、「千倉町里山遊歩道」地域を対象として、地域観光地で行われる散策行動の特性を見いだす事を目的に、被験者(6名)に2時間の散策歩行を課題とし、実験的な歩行追跡調査を行った。VTRで記録した散策行動と地図にプロットした歩行動線の分析によって、地域観光地における散策歩行の特性が、現場で得られた情報をもとに構想される歩行プランにおける目的のあり方によって、強い目的のあるオリエンテーリング型(O型)、目的が弱いワンダ一型(W型)、柔軟に目的を変更して散策を広げるエクプローラー型(E型)と3つに類型されることを見いだした。

地域観光においては、E型に類型される散策のあり方が求められるので、E型へ展開するための条件を整理した。つまり、W型からE型へは、離れた大きなプランがあり、小さな目的がエリアを離れてつながること。そして、O型からE型へは、目的が曖昧になることであり、目的が複数あることである。

第5章では、散策歩行分析をさらに詳細に行い、E型へと展開するための、散策を構成するプランと現場情報との関係を図式に整理し、プラン展開を促進する情報の中でも、視覚的な情報が大きな役割を果たしていることを明らかにした。つまり、歩行主体が現場情報を得て歩行プランを構想したときに描かれている期待イメージに対し、歩行を実行する際に得られる具体的視覚情報が合致することで散策は展開する事が分かった。そして、その視覚イメージを適切

に計画することが、地域観光地における散策歩行者のための案内標識の役割であることを示した。

終章では、地域観光で散策が展開するための案内標識の基本的なあり方を整理した。

W型のプランは、目的が不在な状況において、誘目性の高い情報が提示されることが有効で、着目した視覚情報に対して容易に行動することができるように情報を伝えることも必要である。O型の散策は、現場から得られる情報がプラン構想時に期待したイメージに整合し、誤ったイメージがなされないような情報提示が望ましいと考えられ、誘導的な案内標識はこの様な場面で特に有効に機能する。

W型からE型へまた、O型からE型へと発展するための案内標識のあり方を整理すると、W型からE型へは、誘目性の高い視覚情報が身近にありながら連続して展開するような情報提示が有効であり、O型からE型へは、1カ所のみで完結する単純な認知地図とならないように数カ所の散策の可能性を示し、それらが面として構成されるような情報の提示が求められる。

そして、上記のことをふまえ、南房総白浜町にて、計画への適応を試みた。

本論文は、実験により散策歩行行動の特性、特に歩行プランのたて方と、案内標識の役割を明らかにし、散策歩行行動が展開するための案内標識のあり方を提示した。

以上のように本論文は、人間特性としての散策歩行行動の実態を明らかにし、案内標識など環境情報のあり方の一つの方向を提示し、建築計画学の発展に大いなる寄与を行うものである。

よって本論文は博士(工学)の学位論文として合格と認められる。